

ほっておけない置き薬へ

発行：日本置き薬協会 事務局

最近マスコミの紙面を飾った配置薬業の話題は、「ケロリン桶」販売停止騒ぎだろう。同品を取り扱う広告代理店の業務停止が伝えられると、品不足を見込んでまとめ買いに走る愛好者が続出し、店頭価格1350円がネットオークションで3000円にまで釣り上げられる事態にまでなったという。実際は、解熱鎮痛剤の製造販売元の内外薬品が昨年「ケロリン桶」の販売を引き継いでいるため、桶自体の品不足は単なる噂と憶測から出たものである。もともと広告代理店が約50年前にケロリンの広告入り風呂桶を全国の銭湯に供給する業務を提案し続けられていたが、こうした顛末となった次第。内外薬品は桶だけに「ほっておけない」として対処したと思われるが、配置薬を代表するブランド名を多くの消費者に定着させた風呂桶の存続は意義のあることと思える。

しかし「桶」以上に、「ほっておかれ」そうになりつつある配置薬の実態を綴る一文が読売新聞（3月28日朝刊）の読者投稿に掲載された。埼玉県在住の69歳主婦によるもので「顔なじみだった富山の薬売りのおじさんが、我が家に引退のあいさつにきました。八十二歳になったとのことでした。私が嫁いできた約五十年前、既に入居していた人で、家族は親しみを込めて「おじさん」と呼んでいました。おじさんは年に三度やって来て、独特の富山なまりでにぎやかにおしゃべりしながら、薬箱の薬を補充していきました。家族の病気について覚えていて、よく気遣ってくれました。薬局や病院が少なかった時代どれだけ助けられたか分かりません。最近ではドラッグストアで薬を買うことが増えていましたが、「いいよいいよ」と言ってくれる人でした。小さくなったおじさんの後ろ姿を見おくる時、もう会えないのだろうと思い、涙がこみ上げてきました。「どうぞお元気で」と心で祈りました」

二十歳頃に嫁がれた半世紀に及ぶ主婦人生の折々の思い出に、このおじさんとの遣り取りを思い出されたのであろう。究極の顧客満足である。また、末端医療、あるいはセルフメディケーションの先兵となって活躍してきた配置薬販売業の実態を物語る好例と言えよう。こうしたかたちで配置薬業が衰退していくのも事実であるが、規模を問わずに法人化した配置販売会社が新たな活躍の場を求めているのも事実である。

時代と環境の変化は有っても、配置販売業の「訪問販売」、「対面販売」、「軽医療」は共通している。

消費者に「ほっておかれ」てはならないわけで、上記三点を踏まえながら組織人材、営業形態、商品構成の転換を諮らねばならないターニングポイントが、まさに今である。

それにも、日刊新聞にこうした業の引退を惜しまれて涙したという寄稿文が寄せられるような職業が日本にどれだけあるだろうか。

本件に関するお問合せ先 **日本置き薬協会 事務局**

〒114-0023 東京都北区滝野川3-56-9

TEL. 03-5974-6227 FAX. 03-5974-6224

日 置 協
